

DATA

名 称 起雲閣
所在地 静岡県熱海市昭和町4-2
設計者 不詳

温故

知新

第29回

レトロ建築を歩く

起雲閣



洋館「玉姫」の中心である玉姫の間。左手はサンルームに繋がっている



起雲閣は大正から昭和にかけて建てられた複数の建物から成る



古くから財界人、文化人の別荘地として栄えてきた熱海。

この起雲閣も、大正8年（1919年）に実業家であり政治家であった内田信也（のぶや）が、実母の静養地として築いた別荘が基となっている。

その後何度か持ち主が変わり、その度に増築、改築され、現在の姿に至った。

今回は、2代目の持ち主である根津嘉一郎が増築した洋館「玉姫」「玉溪（ぎょくけい）」「金剛」を中心に紹介する。

「玉姫」は昭和7年（1932年）に完成した。その中心である玉姫の間は、ヨーロッパのデザインを基本にしているが、神社仏閣などによく見られる「折上格天井（おりあげごうてんじょう）」などの、日本独自の建築様式

も用いられている。

玉姫の間に隣接するサンルームは、天井部分のステンドグラスと、色鮮やかなタイルの床が印象的だ。直線と立体を組み合わせた幾何学的模様の装飾が特徴とされる「アールデコ」のデザインを基調としている。

「玉溪」は、玉姫と同じく昭和7年の完成。玉溪の間は、15、16世紀にイギリスで流行した「チューダー様式」に、日本の大工の手法である「名栗仕上げ」（板や柱に削り跡を残す技法）を取り入れたヨーロッパの山荘風を思わせる造りとされている。

さらに暖炉覆いには、古代インドの文字であるサンスクリット語の飾りが施さ



洋館「玉溪」のリビングルーム

れるなど、さまざまな国の様式を融合させた独特の雰囲気を感じさせる空間が広がっている。

「金剛」は玉姫、玉溪より早く、昭和4年に完成した。その後数回の改築がなされ、金剛の特徴といえる「ローマ風呂室」は、多くの部分が現代の材料に変えられてしまったが、ステンドグラスの窓や、テラコッタ製の湯出口などは、建築当時の物が残されている。

その後これらの建物は、昭和22年から旅館として営業され、「起雲閣」という名称もその時代に付けられた。

平成12年（2000年）より熱海市の所有となり、一般に公開されている。熱海市指定有形文化財。



洋館「金剛」に併設されたローマ風呂室